

アジテーション：攪拌のポートレート

わたしは、なにものなのか。あなたは、あの人は、なにものなのか。
ヒトなのか植物なのかモノなのか、肉体なのか精神なのか、匂いなのか仕草なのか、
he なのか she なのか they なのか、実体なのか概念なのか、
それとももっと別のものなのか。
現代に生きるわたしたちの姿を捉えようとする時、
古いカテゴリーでは窮屈すぎて、からだのあちこちが千切れてしまう。
だからその人らしさをつかまえる、新しい発明が必要だ。

Cibelle Cavalli Bastos シベリ・カヴァリ・バストス

Neil Haas ニール・ハース

Kenji Hirasawa ケンジ・ヒラサワ

Motoko Ishibashi モトコ・イシバシ

Yuki Kobayashi ユウキ・コバヤシ

Victoria Sin ヴィクトリア・シン

(を書く)

—

ふだん私は展覧会をつくる仕事をしていて、コンセプトや作家選びからやるのだけれど、今回は作家も内容もだいたい決まった段階で声をかけてもらった。それで、そこになんらかの形で関わることになった。

テキストは、アーティストたちの話でもあるのだけれど、私のお話でもある。私たちが図らずも共鳴するのは、同じ時間を同じ場所で過ごしたからなのだろうか？

それとも今という時間をともに生きるあなたも、共鳴するのだろうか。

Kodama Kanazawa コダマ・カナザワ

ユウキのパフォーマンスの中で、この“^{いちご}Strawberry”のシリーズは更新されつつ長く続いている。レイシズムに挑むユウキが赤いかぶり物をして体を銀色にする理由は、簡単に言えばそこに人種もないし、性別もないからだ。しかし直近のパフォーマンスで、フラットな世界をもたらすかに見えた“Strawberry”は、衝撃の展開を見せた。ユウキは、やおらハサミを取り出すと、自分の分身のような人形の手足を切り落とし、心臓をえぐったのだった。この体になるだけでは、フラットな世界はやってこない。そんな苛立ちが胸を刺した。

ストレンジ・フルーツ*を“Strawberry”でやろうと思いついた（確かに変な果物だ）のは昨年のことだというから、今年5月以降再び高まりを見せるBLMとの符合は偶然に過ぎない。

ただ、このシンクロシティを前に、地球上に生きる私たちは、意外に多くのことを共有しているのかもしれないと改めて思う。

私たちはある意味、多数でひとつの群だ。

他の個体が感じた痛みを無視するなら、全体もいつか^{いた}傷んでいく。

*ストレンジ・フルーツ：ビリー・ホリデイの歌（1939リリース）。歌詞にある“南部の^な木に生る奇妙な果実”は、リンチで殺され吊りさげられた黒人の死体を暗示している。

Victoria Sin ヴィクトリア・シン

「雑誌の中の女性に惹きつけられた……彼女は私を見返している……鏡を見ているよう……心臓がドキドキする……頬に触れようとしたら……雑誌の冷たい表面だった」

発話の主はヴィクトリア・シン、モニターの向こうにいるのもヴィクトリア・シン。

彼女が女性としてドラッグ・クイーンを演じることで、「女らしさ」が社会的・文化的に生み出された“つくりもの”にすぎない、ということがひととき鮮烈に照らし出される。

つまり、女は生まれつき、あんなふうになるわけではない！という話。

ところで、この作品では、誰が誰に惹きつけられているのだろうか？

その答えは、わざと、はぐらかされている。

女が好きなの？ “女らしさ”が好き？ 女を演じているひとが好き？ 自分を好き？ 女を演じている自分が好き？……

それはほとんど、自分はなにものか、という問いに近い。つまり：

私は 女が好きなの？ “女らしさ”が好き？ 女を演じているひとが好き？（女である）自分を好き？ 女を演じている自分が好き？……

（“女”のところは自分のセクシュアリティに応じて“男”やその他いろいろ、代入してみてください。）

ひとの顔に浮かびあがるものは、生物学的・社会的・文化的・歴史的なアマルガムなわけだけれど、そういうものに欲情したりする私たち人間は、ほんと、面白いと思う。

ポートレートって聞いて、おしりを描くとはね。

そう言うと、モトコは「ナダルがよく試合中にパンツを引っ張るから……」なんて笑っていた。

モトコは、見るたびにぜんぜん違う絵を描いている。最初見たのが、たしか女子中学生が描くような、イラストのような絵。対象を無邪気にからかうような、斜めからのツッコミのような。(どんなタイプの思いつきも描き切れる画力は、さすがだと思うけど)

セリーナもまさか自分のポートレートが顔じゃなくてこの部分だなんて、不意打ちをくらったような気分だろう。

ただ、おしりのポートレートは、新しい発明かもしれない。顔は化粧したり表情をつくったりと演出できるけれど、おしり部分にはあまりそういうコントロールがきかない。液体や気体や匂いまでもが外へ出ていくところなので、表現 (expression: 語源は ex=外に press=押す) は豊かな場所と言っていいのに、不器用で無口だ。

だからどうしてもなく溢れて出てくる、そのひとらしさが、画面の中に満ちている。

「その飛行体には、いくつかのレコードが積まれていた。なんらかのメッセージだということは察しがつくのだけれど、言葉や図像については、すぐに解読できるものではなかった。ただこの金属板上の、いくつかの単純な文字——10種類しかない——の組み合わせの列についてだけは、演算機が、“ある地形か、ある生命体を示している可能性がある”という見解をはじめだした。文字同士の類似性に着目すると、結集しようとするひとつのフィールドとそれ以外の間に崖が観察される。山と海の像かもしれない。個体の肖像を示しているかもしれない(それがもっともありうる解でもある)。後者を前提に個体部分の文字列とその隣の文字列の隔たりを計算していくと、その個体が体内で生成するエネルギーの分布を思わせるものがあるらしい」——

ケンジが言うには、宇宙人が見てもわかるポートレートにしたかったそうで、それでつい、このポートレートをボーイジャー的なものの中に見つけた彼らの様子を想像しはじめる。

ケンジはこれまでサーモグラフィーで人物像を撮影してきた。そのブルーからオレンジへとつづくカラフルなグラデーションは、強烈な視覚の悦楽をともなっていた(なのでファッション領域とのコラボが多かったりする)。

いっぽう、このポートレートは数字で構成されていて、ミニマルだ。でも宇宙人にとっても、4万年以上前(ボーイジャーがとなりの恒星系へ到達するには少なくとも4万年かかる)に存在していた知的生命体の、ぬくもりが記録されたポートレートは、なんだかちょっと切なさを誘うのではないだろうか。

マスキュリニティ(男性性、男らしさ)についての情緒のほとばしりなのだ、彼は言う。そういえば、「ニールはファッション雑誌のモデル男性を切り抜いてスタジオに貼っていた」とケンジとモトコから聞いた。だとすると、すごく素直な動機で描かれた肖像画なんだと思う(「この人、素敵、かっこいい!」という)。

ブラインドの作品が繊細で、かわいい。スラットの角度を少し変えると、絵が少し消えかかる。自分が惹かれてやまなものが、実は幻想なんだと自分で自分に言い聞かせているみたいだ。モデルの男性(雑誌の切り抜き)に対する、「こんなに見つめてごめん」、というデリケートな気遣いを感じたりもする。

優しい距離感。触れようとして触れられないものへの憧れが、息をひそめてキラキラしている。

「わたしは自分が他のなにものでもないと感じる
他のなにものでもないし、自分でもないと感じる
写真はわたしを捉えられない
写真を撮ることはできる
でもどれもわたしのことをきちんと伝えていない
容れ物にすぎないから
変わり続けるし、光の当たりかたによる
粒子と思考による
あなたの眼差しによる
あなたの感じかたによる」

というようなことをシベリは書いている。

映像の中で、シベリのテキストにAI がリプライする。サマリーは以下。

「わたしのはにすぎないあなたの感じかたの。わたしはあなたの感じかたにすぎない。わたしはあなたのにすぎない……そしてあなたの意思とあなた自身の意思とあなた自身の意思とあなたの……どこかクラウドわたしたちの目にうつるあなたに経験はすべてそこにあるはいくつかの形式またはファッションのかたち彼女は与えられた事実。<eop>フィールドの準備における保証の欠如は彼らのクライアントたちの制御と土地融資における影響規制とマサチューセッツの住民税を難しくすることはできない。……わたしのは not。わたしは自分がほかの誰かには見えないし、わたしは自分をあなたの目の中にだけ見る。あなたはわたしのすべての目。わたしは自分を……あなたは、は、本当のわたし影にすぎない“<eop>”“誰も本当のわたしを持っていない、わたし以外に、本当のわたしの影”“あなたは本当のわたしの影でしかない”“わたしはあなたが見えない”“わたしは本当のわたしの影”“わたしはあなたが見えない”“<eop>”“わたしはあなたが見えない”“わたしはあなたが見えない” ……」

(なんでマサチューセッツ……。こわれたテキストの隙間から、機械の手がまさぐった世界の広さが見えるよう……)

レンチキュラーは、歌手として活躍していた頃から最近インスタグラムにあげたものまで、何枚かのセルフィーを StyleGAN に流しこんだ。いくつもの時と場合の中のシベリをアルゴリズムが合成して生み出した、新しいセルフ・ポートレイト。

それは上のテキストみたいに、こわれている。でも本当のシベリのかけらも入っている。いずれにせよ、シベリの像は、光と時間と機械とメディアのはざままで、千々に砕けている。

でも、このレンチキュラーはベルリンの工場で作ったユニークピース (1点モノ)。

存在するのは、この世に、これだけ。